

# 幼児の表現を広げる製作環境設定の研究 (1)

## —シャボン玉お絵描きを題材とした2つの環境設定—

山田 修平

(2017年9月12日受理)

### 要 旨

保育現場の表現活動の際に行われる環境設定型の表現活動とレクチャー型の表現活動を取り上げ、幼児の表現を広げる製作の環境設定について考察する。本研究ではシャボン玉お絵描きを題材に環境設定型、レクチャー型の2回の表現活動を立案、実践した。

同じテーマである2つの実践を考察することで①子どもの主体的な取り組み、気づきの機会、②集中(表現に取り組む姿勢、素材に関わる姿勢)についての違い、③表現方法、表現の幅の違い、という3点の違いが見られた。本稿では、保育における表現とは保育者が設定した着地点に子どもたちを導くことが主目的ではなく、子どもたちの自由な表出をねらいとして保育者は表出を促す環境設定をすることが望ましいという視点で比較を行った。子どもの想いを引き受け、子どもが主体となって表出していく表現活動をねらいとする保育、子どもの気づきを促す保育をねらいとする場合、環境設定型の表現活動が有効であると結論づけた。

キーワード 製作、表現、環境設定、気づきを促す保育

## 1. 研究のねらい

幼稚園教育要領表現領域には、子どもが自ら遊び、気づき、学びを生成していく理念がある。一方で保育の現場では子ども一人一人の特性、興味を考慮できずに保育者が画一した目標を設定し、知識、技能を与えることをねらいとする場面がしばしば見られる。文部科学省では指導計画の作成と保育の展開の中で、「幼稚園教育における指導について、一人一人の幼児の特性や発達の課題を捉え、幼児の生活の流れや発達などに即した具体的なねらいや内容にふさわしい環境をつくりだし、幼児の展開する活動に対して必要な助言、指示、承認、共感、励ましなど、教師が行う援助の全てを総称して、指導と呼んでいる。そのうえで指導は、幼児理解に基づく指導計画の作成、環境の構成と活動の展開、幼児の活動に沿った必要な援助的なかかわり、反省や評価に基づいた新たな指導計画の作成といった循環の中で行わ

れるもの<sup>1)</sup>としている。子どもの特性、興味を考慮せずに保育者が画一した目標を設定し、技能を与えることをねらいとする場面という表現領域の目指す理念と異なる場面は、現場で多く見られ、表現活動を行う際の大きな課題である。大橋(2014)は、遊びの持つ教育的意義を軸に展開されるべき幼児教育(保育)において、「指導者の教え込みや誘導による「作品づくり」に終始し、材料や行為、あるいは場や空間そのものを楽しむ遊びが十分に保障されないということは珍しくなく、むしろ深刻である。」<sup>2)</sup>と分析し、これを「表現主義」としている。本学の保育養成課程学生の実習後の感想からは保育現場の製作について、完成物が画一した表現となっている現状が見受けられる。保育者が表現方法から表現される製作物の完成形までを設定しすぎているレクチャー型の表現活動である。さらには、全ての完成物が保育者の予定した画一の形となる、プラモデル型製作と言える保育の事例も少なくない。レクチャー型の保育、プラモデル型製作も大橋の述べる「表現主義」の一例である。大橋は、「表現主題の視点から分類される題材群に基づく作品づくりに終始するのではなく、活動を動機づける「楽しさ」の軸を「活動主題」として明確にさせた上で授業づくりをすることが重要<sup>3)</sup>と述べている。

今回問題とするのは、レクチャー型表現活動、プラモデル型製作そのものではなく、保育で選ばれる製作がレクチャー型、プラモデル型製作に偏っており、自由に創出していく製作の豊かさを一定の保育者、保育者養成課程の学生が理解できていない現状、あるいは理解しているが代案を設けることが難しい保育者がいる現状である。本研究では、大橋の述べる活動を動機づける楽しさを軸にした活動主題の保育計画を提案するため、表現の技法としては同じ内容で「表現主題」型「活動主題」型の2つの実践を試み考察を行い、子どもが自由に展開していくことのできる(完成の形、遊びの展開を子どもが決めることができる)製作のあり方、特に環境設定、導入と展開について実践した2つの事例から考える。その立脚点の1つとして、河邊の遊びを中心とした保育の考えを採用したい。河邊は遊びを中心とした保育とは、「保育者から適切な援助を受けながら、自発的活動としての遊びを中心とした生活のなかで、子どもが必要な経験を積み重ねていくことができる保育である、としている。充実した遊びの中で子どもたちは発達に必要な経験を積み重ねていく。遊びは子どもが展開するものだからといって放っておいたのでは充実しないし、保育者が引張りすぎたのではそれは遊びにならない。子どもの自発性を尊重しながら保育者が的確にかかわり、計画的に環境を構成していくことが求められる。」<sup>4)</sup>としている。子どもの自発性を尊重できる製作時の環境の視点で2つの事例を考察する。

## 2

### 2. 研究の背景

本研究に至った背景は2つある。一つは、保育者養成課程の実習指導、造形、図画工作の講義内で「どのような製作を行えばいいか?」という学生の質問を受けた際、コンテンツのみに関心が偏っている点である。学生が求めるのはコンテンツ内容であり、質問内容に環境設定や導入、展開が含まれないことが多い。要因は学生にとって環境設定や導入、展開につ

いて検討する優先順位が低いことにある。また、必要性を感じた際、つまり指導案を検討しているタイミング、時期に相談できる環境が不十分という点が挙げられる。そのため、学生にとって製作内容を決定すると同時期に環境設定や導入、展開の重要性を伝える必要がある。

二つ目は、現職の保育者研修の講師を引き受け、講義前に担当者と打ち合わせをする中、講義前後に保育者にヒアリングを行う中で得た、環境設定や導入、展開への悩み、そして保育のねらい設定に対する先入観についての現状である。現職の保育者は、学生と異なり、環境設定や導入、展開への優先順位は高いが、日々の保育の中で検討する時間が十分に取れていない。また、製作のねらいについては、五領域の表現の部分にネガティブな意味で捉われており、五領域の表現以外からねらいを持ってくることが多くないことがわかった。なお、保育者からのヒアリングでは、コンテンツを欲し、その先に導入や展開を求めるのは要求が多すぎると質問自体を遠慮する場合と、学生同様に導入や展開についてまで視点が広がっていない場合があった。

以上を踏まえ、環境設定や導入、展開について特化した実際の保育の様子を学生や保育者に伝えることで、環境設定や導入、展開についての検討を促したい。同様に環境領域のねらいを持った実際の保育の様子から、ねらいの多様化がもたらす保育の展開の豊かさを提案したい。

### 3. 実践内容

学芸の森保育園で実践をした事例、淑徳大学東京キャンパスボランティアセンター主催事業ぶち・ぴち教室の事例を報告する。いずれもシャボン玉お絵描きという同テーマの事例であるが、導入が異なる2事例である。環境設定を工夫し、子どもの気づきを促す活動主題の実践(事例1)と描画方法をレクチャーするレッスン型の表現主題の実践(事例2)である。

#### 3-1 大きな紙にシャボン玉お絵描き

##### 概要


シャボン液に絵の具を混ぜると、描画可能なシャボン玉絵具ができる。吹き柄にシャボン絵具を付け、シャボン玉をつくり、シャボン玉が紙の上ではじけると、その形(円、楕円など)が紙の上に表現される。筆では表現できないオートマチック画法である。表現の軌跡が表現者の手元を離れ、ある種偶然に委ねられる点で、失敗という感覚が少なく、遊びの要素が強い。偶然の中に試行錯誤の結果も求めやすい描画体験となり、子どもだけでなく大人も楽しめる内容である。



##### 実践のねらい

活動を動機づける楽しさを軸にした活動主題の保育計画の実践がねらいである。特に具体的な楽しさを「気付いて活動を展開させる」「思いついた表現を試してみる」という2点に設定した。シャボン液に絵具を混ぜるとシャボン玉絵具となるポイントを声かけや指導する

ことなく、環境設定から促し、子どもたちが自ら気づき展開させていくことである。実践の流れとして①シャボン玉で遊ぶ。②シャボン液に絵具を混ぜる。③シャボン玉お絵描きを楽しむ。という3つの展開がある。多くの保育者は②シャボン玉に絵具を混ぜる段階で具体的な方法を指導し、子どもたちは楽しみながら絵具を作る。あるいは、事前にシャボン玉絵具を完成させておいて、表現の部分だけを保育に取り入れる。どちらにせよ子どもたちは新たな表現の世界を楽しむことができるが、シャボン液に絵具を混ぜるという気づきを子どもから奪ってしまっていることに保育者は気づくことが難しい。非日常で魅力的な行為を、気づきの機会を設けずに当然のように教えてしまっは、本題材の核の一つを逃してしまっている。本実践では、大きな紙の上にシャボン液の入った容器と絵具を置いておき、子どもがシャボン液と絵具を混ぜるという気づきを促す環境設定をするのみで、具体的な声かけを行わない。環境から促されることを目的とした環境設定型の表現活動である。





### 3-2 事例1 環境設定を行い、気づきをねらいとしたシャボン玉お絵描き<sup>注1)</sup>

事例1	大きな紙にシャボン玉お絵描き	
実践日	平成28年5月●日／実施時間：9：40～10：40／場所：園エントランス	
対象	学芸の森保育園5歳児12名／保育者：2名／実践者：山田修平	
ねらい	①子どもが身の回りの環境から遊びを工夫、発展させる経験。②友達と協同し、気づきを共有し遊びを発展させていく。③シャボン玉のいろいろな遊び方を楽しむ（吹き柄、てっぽう型、大きな輪っか、絵の具を混ぜる）。④シャボン玉の特性を知る（シャボン液の色、粘度、絵具を混ぜることができる）。⑤遊び絵の体験をする（シャボン玉お絵描き） 今後の遊び絵へつなげるねらい	
時間	保育者の動き、配慮	子どもの動き
事前準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シャボン玉で絵を描くことは子どもたちに伝えない。保護者には汚れてもいい服装を用意するように伝える。</li> <li>・シャボン液を入れた容器（12個）、大きな紙（2m×2m模造紙をつなげたもの）絵具（12色入1箱）、てっぽうタイプのシャボン玉ガン（12個）、大きなシャボン玉を作る輪っか（3個）をエントランスに用意しておく。</li> <li>・大きな紙の下にはクロスマスカーで養生を行い、汚れへの配慮を行う。</li> </ul>	
		

<p>9:40</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・階段の上段に座るよう声をかける。</li> <li>・挨拶をする。</li> <li>・シャボン玉で遊ぶこと、シャボン玉遊びは冬よりも梅雨時期の湿った空気の方が適していることなどを伝える。</li> <li>・梅雨は洗濯物が乾きにくいことを例に、じめじめした空気の方がシャボン玉は割れにくいことを伝える。</li> <li>・二人に一つシャボン玉の容器を配り、一人に一つ吹き柄を配る。</li> <li>・シャボン玉で遊ぶ実演をし、自由に遊ぶように声をかける。</li> <li>・強く吹きすぎない、細く長く吹くことを伝える。</li> <li>・子どもたちの遊びを認め、想いを共感する。</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・階段に座る。</li> <li>・挨拶をする。</li> <li>・話を聞き、なぜ梅雨の方がいいのか？質問をする子どもがいる。</li> <li>・話を聞き、納得する。</li> <li>・容器、吹き柄を受け取る。</li> <li>・シャボン玉で遊ぶ。</li> <li>・風向きを考慮し、シャボン玉が飛びやすい方向を模索する子どもがいる。</li> <li>・連続してシャボン玉を吹くことが難しく、コツを聞いてくる男児がいる。</li> <li>・小さなシャボン玉を多く吹きたい女児、一つの大きなシャボン玉を作りたい女児などがある。吹いたシャボン玉が長い時間割れずに飛んでいく様子を観察する男児、自ら吹くことよりも風に乗って高く飛んでいくことに興味を持つ女児がいる。</li> </ul>
<p>9:55</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・てっぽうタイプのシャボン玉ガンを一人一つ配り、遊び方を説明する。</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シャボン玉ガンを受け取り、説明を聞く。</li> <li>・シャボン玉ガンで遊び始める。ゆっくりと空気を送り続けることで大きなシャボン玉ができることに気づく女児。気づきが伝播し、大きなシャボン玉づくりが始まる。</li> <li>・大きなシャボン玉づくりのコツがわかり、吹き柄で挑戦する女児がいる。</li> </ul>
<p>10:00</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが遊ぶ傍ら、声がけをせずに、大きな輪っかで大きなシャボン玉（30cmサイズ）をつくる。容器は植木鉢の水受け。</li> <li>・輪っかは三個のみなので順番で行うように声をかける。順番を待っている子がいる時は二回シャボン液につけたら交代するようアイデアを出す。</li> <li>＊階段に座っていた子どもたちの動き範囲を広げることもねらいに含む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きなシャボン玉に反応する女児、男児がいる。</li> <li>・やってみたいと想いを保育者に伝える。順番に大きなシャボン玉づくりを楽しむ。順番待ちをする女児は、友だちがつくる大きなシャボン玉に興味し、早くやってみたい気持ちが高まる。</li> <li>・膨らませることが難しい男児がいる。輪っかの中にシャボン膜を張ることがコツとわかっているが、気持ちが焦り、動きが雑になる様子。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人一人順番にゆっくりと液に浸けるように声がける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>シャボン液が泡立ち、膜が張りづらい状況になる。そのストレスから、輪っかを激しく浸け、結果泡立つ悪循環となる。</li> </ul>
<p>10:05</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きなシャボン玉づくり、シャボン玉ガン、他の環境への興味など、思い思いにシャボン玉遊びを楽しむ様子を見守る。</li> <li>わからない。触って確かめてみたらどうか？ と提案する。</li> <li>使っていると答える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きなシャボン玉を作り、順番を譲った女兒が大きな紙の上に乗っているシャボン液容器に気づく。(大きな紙の意図には気づいていない)</li> <li>容器に入っている液は、水なのか？シャボン液なのか？ という疑問から興味を持つ女兒。(シャボン液だろうという予測と期待)</li> <li>触ってみた結果、ぬるぬるするため、シャボン液と判断する。使っているのか？と質問をする女兒。 *吹き柄でシャボン玉作りをするかと予想したが、シャボン玉づくりは行わなかった。</li> <li>横にある絵具に気づき、何のためにここにあるのか？ という質問をする女兒。</li> <li>使っているのか？ と質問をする女兒。</li> </ul>
<p>10:07</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>なぜだろう？ わからない。と返答する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>園長先生に聞き、使って良いという回答を得る。赤い絵具チューブを手に取り、一時何をするか悩む様子。シャボン液に混ぜていいか？ という質問をする女兒。 *シャボン玉の遊びからシャボン液へ興味が移行した。子どもの主体性に任せ、環境が遊びの発展を促した場面である。</li> </ul>

<p>1010</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わからない。園長先生に聞いてみることを勧める。</li> <li>・混ぜていいと返答する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「溶けて混ざるね。」と行為に共感する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・赤の絵具をシャボン液に入れ、横にあった絵筆で混ぜる女兒。</li> <li>・様子を伺っていた2名の女兒が遊びに加わり、ピンクを作ろう。という遊びに展開する。</li> <li>・容器は他に5つあり、他の容器に様々な色を入れ、混色を楽しむ時間となる。 *シャボン玉お絵描きを活動の着地点とし、そのためにシャボン玉遊びを導入で行ったが、想定よりもシャボン玉液との素材遊び、色作りの時間が長く、遊びが完全に分岐したように感じた。目の前の素材、出来事に強く惹かれ、能動的に働きかける子どもたちの遊ぶ力を再確認した。</li> </ul>
<p>10:20</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵具の消費量の点で、無駄にしないよう声がけをする。シャボン玉を作ってみたら? という声がけは行わない。</li> <li>・描いていいと答える。どうなるのか楽しみと行為に共感する。</li> <li>・シャボン玉お絵描きの表現に驚き、想いを共感する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・混色の傍ら、後から参加した女兒が紙の上に描いていいのか? と質問をする。</li> <li>・シャボン液だから吹き柄で吹いてみよう、と声に出し、吹き柄で赤いシャボン玉を作り、紙に赤色を乗せる。</li> <li>・赤く丸い表現が紙の上に広がり、周りの友人から歓声が上がリ、行為が伝播する。ここから男児の参加が見られる。</li> <li>・吹き柄、シャボン玉ガンでシャボン玉を作り、紙の上に表現をする。</li> <li>・吹き柄を筆のように使い、紙の上に描画する。</li> <li>・フィンガーペイント、足の裏で伸びるシャボン液絵具を楽しむ。</li> <li>・紙の上が遊びと表現で賑わうことで、大きなシャボン玉づくりに戻るなど、遊びが再度分化していく。初期の女兒2名も大きなシャボン玉遊びへ移る。</li> <li>・様々な表現で紙面が色で埋まる。足の描画により、紙が破れる。</li> <li>・破れることで遊びが落ち着き始める。</li> <li>・白い部分を探し、色を置く様子が見られる。どんな色があるか観察をする。</li> <li>・遊びをとめる。</li> </ul>
<p>10:27</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現を鑑賞し、自分が描いた表現、友だちの足形、破れてしまったことなどについて感想を言う。</li> </ul>


		 <ul style="list-style-type: none"> <li>・色が混じると茶色、灰色になることを確認する。「汚い。」というような発言は見られない。</li> <li>・活動を振り返る。</li> </ul>
<p>10:30</p>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・滑って転ばないように注意を払う。</li> <li>・「素敵な色になったね。」と描画する子どもたちに声をかける。</li> <li>・手を止めて話を聞くよう声をかける。</li> <li>・紙の周りに集まるよう声をかけ、シャボン玉で絵が描けたことを振り返る。シャボン玉の形、手形、足形、柄で描いた表現など表現を鑑賞する。</li> <li>・子どもたちの声を引き受け、共感する。</li> <li>・色が混じった茶色い表現について、素敵な色になったと伝え、作品を写真に撮って残すことを伝える。(大きな作品のため、保存は難しい。その旨、今回は伝えなかった。)</li> <li>・活動を振り返り、終わりの挨拶をする。</li> <li>・片付けること、手足を水道で洗うことを声かける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思い思いに表現や遊びについての感想を口にする。</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶をする。用具を片付け、順番に手足を洗う。</li> </ul>



### 3-3 事例2 導入時に描画方法を説明するシャボン玉お絵描き<sup>注2)</sup>

事例2は保護者と参加する子育て支援の現場である。保護者も子どもと共に驚きと学びを楽しみながら体験してもらいたいことをねらいに設定した。保護者と共に参加する事例2の実践では、子どもを主に見た場合、メリットとなる部分とデメリットとなる部分がある。メリットは、保護者に危機管理を行ってもらえる点、子どもの想いや疑問に保護者が対応してもらえる点などである。この親子コミュニケーションを生み出す場の設定が子育て支援の大切にすべきポイントと捉えることもできる。一方で、デメリットは保護者の干渉である。今回のシャボン玉お絵描きのように明確な描画方法が存在する遊びについては、保護者が良かれと思い、やり方を積極的に提示してしまう場面が多い。子どもの気づきを待つ時間の豊かさを保護者に求めることはまだまだ難しい。同時に参加者としての保護者の立場を考えると、やり方を教えてもらえないことにストレスを感じる方もいる。そのため今回は、円滑な表現遊びができるよう事前に表現の方法を説明する表現主題のレクチャー型の導入を用いた。

事例2	遊び絵で遊ぼう (大きな紙にシャボン玉お絵描き、ビー玉コロコロお絵描き、マーブリング) 淑徳大学ボランティアセンター事業 ぶち・ぴち	
実践日	平成28年2月6日/実施時間: 13:00~15:00 /場所: 淑徳大学東京キャンパス3号館体育室	
対象	親子20組 1歳児3名、2歳児8名、3歳児8名、4歳児4名、5歳児2名、6歳児2名/ スタッフ: 8名/実践者: 山田修平	
ねらい	①新しい技法で描く描画体験。②遊びが表現の軌跡となる遊び絵の体験。③親子で表現体験をする。④遊びの中で工夫し、工夫が表現の違いにつながる体験。⑤保護者に向けて筆以外で描く可能性を知ってもらう。	
事前準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>3種類の遊び絵の環境設定、すぐに描画が行える環境まで設定しておく。</li> <li>室内全面にクロスマスキングテープで養生を行い、汚れへの配慮を行う。</li> <li>(シャボン玉絵) 大きな紙を敷き、周りにテーブルを設置。絵具、吹き柄、筆洗バケツ、手拭きタオルを卓上に用意する。</li> <li>(ビー玉コロコロ絵) 机、トレー内にマスキングテープでハガキサイズの紙を貼付(人数分) ビー玉が5個入った絵具バケツ4色1セットを3セット、スプーン、筆洗バケツ</li> <li>(マーブリング) 机、トレー6個、紙、マーブリング用絵具、新聞紙、廃液用バケツ、水入れ替え用バケツ、手拭きタオル</li> </ul>	
時間	保育者の動き、配慮	子ども、保護者の動き
13:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>会場に入った参加者と挨拶コミュニケーションを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>会場に入り、荷物を置き、場所を確保したりする。スタッフと挨拶をする。</li> <li>*親子で会場を見て回る組が多く見られたが、設置されている描画用具は眺めるだけで触ることはなかった。保護者が触らないよう声かけをしているわけではない。</li> </ul>

<p>13:05</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶とスタッフ紹介をする。</li> <li>・本日の活動内容を説明する。</li> <li>・趣旨：遊びの中で表現が生まれ、遊びの軌跡を表現として残していく。保護者の方に、お子さんに正しいやり方を執拗に教えることはせず、遊びを見守るスタンスで活動を共有してほしい、工夫ややりたいことがたくさん見て取れる旨を伝える。 (シャボン玉絵の導入、説明の部分を記録)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶をし、スタッフに拍手を送る。</li> <li>・説明を聞く。</li> </ul>
<p>13:08</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境設定について3点伝える。①大きな紙が敷いてあり、ここに表現する。②シャボン玉液に絵の具が混ぜてあることを伝える。③シャボン玉を吹く、吹き柄、シャボン玉ガンを紹介する。</li> <li>・シャボン玉お絵描きの表現方法を説明する。吹き柄やシャボン玉ガンをシャボン玉液に浸け、空中でシャボン玉を膨らませる。絵具が混じっている分、シャボン玉は重いので紙の上に落ちる。シャボン玉が紙の上に載り、弾けることでシャボン玉の軌跡が紙に残る。色、大きさ、数など自由に表現する場所ということ伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明を聞く。</li> <li>・説明を聞き、遊びの軌跡が表現になった際、歓声上がる。*実演を見せることで今回は3歳児まで理解することができた。2歳以下は保護者のサポートにより伝わった。保護者がいることで、保育現場で幼児にのみ伝える場面に比べ、情報の伝達は円滑である。見るべきポイントを保護者が案内してくれる点、ポイントを復習してもらえ点が要因と考える。</li> </ul>
<p>13:20</p>	<p>(シャボン玉お絵描きのみ記録)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手探りでシャボン玉お絵描きを始める親子をその方法で構わないという雰囲気サポートする。</li> </ul>  	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シャボン玉お絵描きを始める。吹き柄を手取る親子が多く、はじめにシャボン玉ガンを手取る親子は少ない。</li> <li>・シャボン玉を膨らませる経験を持つ親子は多いようで、いつものシャボン玉とは膨らませる感覚が違うことに慎重になっている様子である。 *絵具が混ざっているので、連続して複数のシャボン玉が吹き柄から飛びにくい。</li> <li>・シャボン玉を飛ばすことに成功すると、シャボン玉が描く軌跡を親子で興味深く見つめる。色による奇跡の濃さの違いなどを見つけ、濃い色を好む親子が多く見られる。 *黄色は淡く、赤、青、紫が濃く表現される。設定されている色を丁寧に試す様子が見られる。</li> <li>・赤から青と吹き柄を洗わずに使うと、色が混ざること気がつく親子がいる。混ざること良しとする親子と、混ざりの無い原色を好む親子に分かれる。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの自由な遊び＝迷惑をかけると思い規制をかけすぎてしまう保護者に、「間違いはない。自由に進めていく遊びのプロセスを見てあげてください。」と声を掛ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現に夢中になり、紙の上に乗る子どもと、紙の上に乗ることを制する保護者が多く見られる。 *説明時に紙の上に乗る見本は見せていないが、禁止の案内はしていない。</li> <li>・紙の上で混ざり合う色と形を鑑賞する親子と、吹いている行為をカメラに収める親子、大きく2つに分かれる。カメラに収める様子は、シャボン玉を吹く様子を記録する場面が多く見られた。*保護者の捉える体験の価値、残しておきたい像は行為＝遊びのプロセス、行為と見て取れる。</li> </ul>
<p>14:35</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・片付けの音がけをする。</li> <li>・作品の記録について、写真に撮って持ち帰る方法、希望者は親子で表現した箇所をハサミで切り抜いて持ち帰る方法の2種類を提示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びの手を止め、片付けに入る。</li> <li>・記録方法を選び、ハサミで持ち帰る部分を子どもと探し、切り取る親子がいる。</li> </ul>
<p>14:40</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本日の活動の振り返りと遊びから生まれる表現の豊かさ、強さについて話し、まとめとする。</li> <li>・終わりの挨拶、拍手で中締めとする。</li> <li>・お茶とアンケートを配り、クールダウンの時間を設ける。その間、スタッフで空間を整え、活動の終わりの落ち着いた雰囲気と空間を設定する。*帰りを促す急かした雰囲気は作らない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話を聞く。</li> <li>・挨拶をし、拍手をする。</li> <li>・お茶とアンケートを受け取り、アンケートに回答。帰りの準備を進める。</li> </ul>
<p>14:50</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・帰りの準備がすんだ親子から流れ解散とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・順次、流れ解散する。</li> </ul>

## 4 考察

シャボン玉お絵描きという同テーマでありながら、ねらいと環境設定が異なる事例を考察する。

### 4-1 事例1考察

事例1は「子どもが自ら気付いて活動を展開させる」「思いついた表現を試してみる」という二点が大きなねらいの活動主題の実践である。設定したねらい①身の回りの環境から遊びを工夫、発展させる経験について、子ども自ら環境に気づき、発展をさせる流れが10:05から見られた。子どもたちが気づき、確認をとりながら、紙の上にシャボン玉で表現をする活動に発展したことから、今回、優先したねらい①は達成された。気づき、表現を始めた子どもたちの遊び(表現)が伝播し、参加した全ての子どもが大きな紙の上でシャボン玉お

絵描きを体験した点については、実践者として安堵した結果である。それほど今回のシャボン玉で遊ぶ行為は魅力的に受け止められた。適度に風があり、屋根まで舞い上がる環境もシャボン玉遊びを魅力的にする環境の要因であった。子どもたちの気づきを待ち、発展を観察する上で、10:10までの30分間、想定時間以上に大きな紙の存在が意識されなかったことが興味深い。2 m×2 m畳2畳ほどの大きな紙の存在に気づくことよりも目の前の遊びが優先され没入できる感覚は、保育者として子どもを理解する点において大切にしたい視点である。同じサイズの紙であっても室内であれば、大きな紙の存在は大きな魅力として映る（あるいは映る位置にしか配置できない）だろう。設定する環境次第で、同じサイズの紙であっても環境設定のメインとなるか否かを保育者が決定できる事例としても今回の実践は活用できるように感じる。

保育者として、子どもの遊びに没入する感覚から学ぶことは多い。没入することが育む遊びは、保育者が意図しない遊びの発展や遊び同士、友達同士のつながりを見せてくれるからである。この部分が計画を練る上で常に土台にあることが保育の基本であろう。その土台に、保護者の意向や獲得される能力が優先されて置かれてしまうことのないよう、保育者養成課程の教員として保育者研修や学生指導を行うべきだと確認した実践であった。

環境設定で気づきを促し、かつ全ての参加者にねらいを設定する場合は、遊び自体が持つ魅力の度合いについても熟慮すべきである。特にこの感覚は、経験に裏付けされる。学生には難しい感覚である。保育者として遊びの魅力度合いの把握とねらいのバランス感覚について本実践をきっかけに学生に伝えられるよう本実践を教材としたい。

#### 4-2 事例2考察

事例2では表現主題のレクチャー型の導入を用いた。結果、筆者が概ね想定したとおりの活動、作品となった。事例1と比較し、紙は遊び場の環境要素よりも、作品を描く場として存在していた。筆者が環境設定した絵の具の色がベースに彩度の高い(色が混じっていない)表現が多く見られた。見た目が鮮やかで、作品としては万人の好む作品となったと言える。シャボン玉で描く行為は楽しめていたが、描く行為を子どもが主体となって工夫展開していく行為は、事例1と比較し多く見られなかった。また、子どもが設定された活動から脱線すること(展開すること)を保護者が管理していた場面(紙に乗ってはいけない、絵の具、作品上の生乾きの表現を指で触らない、など)が見受けられた。この保護者の配慮は表現主題の声がけと見ることができる。

保護者が子どもに答えを教える、そのコミュニケーションを我慢してもらうことは難しい。一方、子どもの気づきに任せ、ヒントを与えないことは難しい。良かれと思ってヒントを積極的に与えてしまう。その場合、ヒントに引きずられ、子どもが目の前の工夫を捨てる、あるいは諦め、ヒントに走ってしまう場面を子育て支援の現場でよく目にする。その瞬間、保護者はやりがいを感じるものであるが、子どもの遊びのプロセスからすると、選択肢を奪ってしまっている結果である場合も少なくない。事例2の場合、立案の時点で保護者に向けて気づきを待つ姿勢の重要性を説明し、引き受けてもらうことは難しいと想定し一斉保

育のスタイル、プラモデル型の表現活動と分類することができるスタイルをとった。子どもがいる空間であっても専門的な話を聞きたい保護者と、子どもと共に遊びに来ている保護者がいる。子育て支援の現場でどれくらいのボリュームと内容で子どもを見る観点を伝えていくか。課題として今後検討したい。遊びとは失敗が許される世界である。失敗後のリスクがないから遊べるのである。そして、遊びのプロセス、遊びの結果に学びがある。失敗を親子で共有して笑い合える時間こそ子育て支援を行う価値のひとつと考え、子育て支援事業を継続的に行う中で保護者にも伝えていきたい視点である。

#### 4-3 事例1、事例2の比較

ここで事例1、事例2を比較し、子どもの自発性を尊重できる製作時の環境のキーワードを明確にしたい。そのうえで事例を比較すると以下の3点で違いが見られた。

- ① 子どもの主体的な取り組み、気づきの機会に差異が見られた。
- ② 集中について（表現に取り組む姿勢、素材に関わる姿勢）違いが見られた。
- ③ 表現方法、表現の幅に違いが見られた。

①事例1の環境設定型の実践は、遊びの世界の中で主体的な気づきが生まれ、気づきのポイントを複数確認できた。事例2は表現方法をレクチャーとして提示しているため、気づきの機会は少ない。遊びの種類としてはモデルに近づけるか模倣するという雰囲気であった。

②集中について差異が見られた。環境設定型の実践は、ゆっくり集中する表現遊びよりも、ダイナミックにスピーディーに展開していく遊びが環境で優位となった。目標とするモデルがないため、瞬発力のある展開が各所で発生し、特に魅力的な展開は子ども間で共有され、協同的な遊びへ発展した。紙の上での表現はめまぐるしく遊びが変化し、集中し表現をじっくり工夫する雰囲気は生まれなかったが、素材に主体的に関わり、集中して素材を工夫する時間があったと言える。レクチャー型の実践は、講師がモデルを提示するため、そのやり方を参考に、目の前の表現に向き合い、どうするときれいにシャボン玉を画面に置けるか？といった工夫とじっくりとした集中が見られた。一方、素材に関して、絵の具のチューブが近くに置いてあるにもかかわらず、濃度を工夫する様子が見られなかった点など、素材の理解と工夫はあまり見られなかった。

③生まれる作品の表現方法、表現の幅に違いが見られた。事例1環境構成型の実践では、画面の表情はシャボン玉の丸以外に手足の形、吹き柄の線など様々な表現が混じり合い、色も大いに混色され、自由な表現となった。多くの色が混じり合い、茶色やグレーの部分も多くなった。事例2レクチャー型の実践では、表現者が紙の上に乗って表現する機会が少なく、シャボン玉の丸表現が大半となった。そのため、表現手段が統一され、色の混じり合いの点でも彩度が高い。完成作品だけを焦点化すると、レクチャー型の画面のほうが色がきれいと思える方が多いだろう。今回、表現物だけを切り取りどちらが優れているという観点について優先されるものではないが、保育において作品のその後の活用を視野に入れると、レクチャー型の方が汎用性は高いと思われる。

## 5. 結論

今回、子どもの想いを引き受け、子どもが主体となって表出していく表現活動のあり方の一つとして、環境設定を工夫することで子どもの気づきを十分に促し、引き受ける活動主題の活動の有効性を検討すべく、シャボン玉お絵描きをテーマに二つの実践を行った。事例1 環境設定型の活動主題の活動、事例2 一斉保育のスタイルをとった表現主題のレクチャー型表現活動、異なる環境設定と異なる導入で実践を行った。子どもの自発性を尊重できる製作時の環境の視点から考察すると、環境設定型の活動主題をとった事例1が子どもの自発性を尊重するうえで有効であると言える。事例2と比較し、事例1の実践が子ども主体の表出を促す活動となった要因は、4-3で挙げた①、②のとおりである。環境設定型の表現活動を取り入れることで、子どもたちの気づきをより多く引き出す機会につながり、結果、表現の幅を限定することなく、保育者の無意識の操作も介在しにくい無垢な表現、純粋な表出につながった。事例1では素材との関わり、素材の理解、工夫も見られた。幼稚園教育要領、表現領域では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」<sup>5)</sup>とねらいにしている。環境設定型の表現活動は「自分なりに」を最大限引き受ける活動主題のあり方の一つと言える。「自分なり」は子どもの数だけ事例がある。着地点は一つでは無い。保育経験の長い保育者は、ねらいを設定し、ねらいを軸に環境構成、導入を含めた保育を立案する。しかし、実際、保育経験の浅い保育者ほど、結果＝着地点を先行して決定し、保育計画を結果に擦り合わせていくプロセスを採用する傾向が少なくない。環境設定型を保育に採用することで、保育者が子どもたちの主体性の力、可能性を認識しやすい点においてもメリットがある。保育者の想定を超えた表現に出会う機会につながり、これは保育のやりがいに大きく寄与するところであろう。

最後に、事例2は事例1に劣る活動という結論ではない。今回、子どもの自発性を尊重できる製作時の環境の視点から考察すると、事例1が有効であったが、事例2レクチャー型の表現作品のほうが作品の色彩が鮮やかであり、作品としては汎用性が高く、万人に評価されやすいという見方も可能である。作品を行事に活用するなどの流れがあれば、行事とのつながり、飾などのねらいが立てることができ、今回の検証とは別の角度の評価につながるであろう。

## 6. 課題

14 本研究は遊び絵、モダンテクニック<sup>注3)</sup>と言われる表現技法をテーマとした実践を採用した。レクチャー型の保育であっても子どもにとって技法が初めての体験の場合、活動主題の要素は多少含まれる。しかし、保育現場では技法、表現方法全てが子どもにとって経験されたものであり、その上でプラモデル型製作を行う場面も少なくない。製作を全くのオリジナルで立案する保育者は多くない。多くの保育者は書籍、インターネット等で製作モデルを目にし、実践を行う場合が多い。そして製作モデルを無目的に実践し、子どもをただ作るだ

けの作業者としてしまう保育、つまり表現主題の保育となってしまふ場合が少なくない。そこで製作モデルをねらいのある活動に組み込み、子どもの自由な発想を引き受ける活動主題とする保育計画のあり方について今後検討する必要がある。

表現や製作に関する書籍等に導入や展開について、特に学生が手に取りやすいビジュアルが豊かで手に取りやすい書籍については導入、展開について述べられていない場合が多い。製作方法のみの記載となっており、書籍を開いている状況では学生が導入や展開について検討する機会が生まれにくく、結果、検討することなく実践してしまう。養成課程表現領域の講義を担当するものとして、この流れについて、講義以外のアプローチで具体的に対応すべきと考えている。

## 7. 謝辞

本実践は中野圭祐教諭（東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎）の環境設定を参考にしたものである。子どもの気づきにねらいを置いた環境設定、環境設定によって保育者が意識せずに子どもの気づきを奪っている事例を参考に立案した。中野先生と実践の場を提供くださった学芸の森保育園に謝辞を述べたい。

### 注

注1) 学芸の森保育園は、実践写真の研究利用について保護者の同意を得ている。

注2) 事業内の活動記録写真を広報、研究利用に同意いただき実践を行っている。

注3) 造形教育においては、デカルコマニーを含むモダンテクニックの技法は、戦後早い時期から取り入れられ、1950年代後半の美術教育関連雑誌には特集が組まれているほど普及していた。<sup>6)</sup>

### 引用文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育指導資料第1集指導計画の作成と保育の展開』フレーベル館、2013、p.4
- 2) 3) 大橋功「美術教育における活動主題を軸とした題材群設定についての研究」『美術教育学研究』2014、p.62
- 4) 「遊びを中心とした保育」河邊貴子、萌文書林、2005、p.15
- 5) 文部科学省、幼稚園教育要領、第2章ねらい及び内容
- 6) 「造形教育におけるデカルコマニーの意義」『富山大学人間発達科学部紀要第10巻第2号』隅敦、2016、p.45